令 和 6（2024）年 度

# 一般選抜公立大学中期日程　試験問題

経済経営学部　経済経営学科
人間健康科学部　スポーツ健康科学科

# 小論文

**問題の選択について**

出願学科の指定に応じて解答してください。指定された問題以外を解答した場合は、採点の対象となりません。

経済経営学部　経済経営学科　　…第１問、第２問を解答
人間健康科学部　スポーツ健康科学科 …第１問、第３問を解答

**注　意　事　項**

１　試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。

２　受験番号と氏名は、指定された問題の解答用紙にのみ記入してください。指定の解答用紙以外に記入した場合は、採点の対象となりません。

３　解答には鉛筆かシャープペンシルを使用してください。

４　試験時間は１２０分です。

５　試験終了後、問題冊子と解答用紙はすべて回収します。

６　何か伝えたいことがあるときは挙手してください。

**第 1 問　（共通問題）**

次の文章を読み、設問に答えなさい。

人びとはバラバラなままで生きていく。価値観は多様化する。ライフスタイルは様々になる。それは悪いことではないだろう。日本人はこれからどんどんと、バラバラになっていく。

しかし、人間は社会的な生き物なので、バラバラなだけでは生きていけない。私たちはどうしても、社会生活を営んでいくうえで、地域社会で決めていかなくてはならないことがある。

いままでは、少なくとも 1980 年代までは、遠くで（霞が関で）、誰かが（官僚が）決めてくれていたことに、何となく従っていれば、いろいろ小さな不都合はあったとしても、だいたい、みんなが幸せになれる社会だった。しかし、いまは、自分たちで自分たちの地域のことについて判断をし、責任を持たなければならない。その判断を誤ると、夕張市のように自治体でさえも潰れる時代が来てしまったのだ。

ただ、この一点が変わったために、日本人に要求されているコミュニケーション能力の質が、いま、大きく変わりつつあるのだと思う。いままでは、遠くで誰かが決めていることを何となく理解する能力、空気を読むといった能力、あるいは集団論でいえば「心を一つに」「一致団結」といった「価値観を一つにする方向のコミュニケーション能力」が求められてきた。

しかし、もう日本人はバラバラなのだ。

さらに、日本のこの狭い国土に住むのは、決して日本文化を前提とした人びとだけではない。

だから、この新しい時代には、「バラバラな人間が、価値観はバラバラなままで、どうにかしてうまくやっていく能力」が求められている。

私はこれを、「協調性から社交性へ」と呼んできた。

「平田君は、自分の好きなことは一生懸命、集中して頑張るけれども、どうも協調性に欠けるようです」と小学校一年生から通信簿に書かれてきたような人間が、作家や芸術家になる。私自身、自分の好きなことしかやってこなかったし、協調性はないものと自覚している。

しかし、演劇は集団で行う芸術なので、演劇人には「社交性」はあるのだ。私たちは、幕が下りるまではどんな嫌な奴とでも、どうにかして仲良くする。プロの世界などはひどいもので、舞台上では、「あなたがいなければ死んでしまうわ」と言っていても、楽屋に帰ればそっぽを向いている連中もたくさんいる。それでいい舞台ができるのなら、私としてはまったくかまわない。これもまた「社交性」だ。

しかしこの社交性という概念は、これまでの日本社会では「上辺だけのつきあい」「表面上の交際」といったマイナスのイメージがつきまとった。私たちは、「心からわかりあう関係を作りなさい」「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」と教え育てられてきた。

しかしもう日本人は心からわかりあえないのだ……と言ってしまうと身もふたもないので、たとえば高校生たちには、私は次のように伝えることにしている。

「心からわかりあえないんだよ、すぐには」

「心からわかりあえないんだよ、初めからは」

この点が、いま日本人が直面しているコミュニケーション観の大きな転換の本質だろうと私は考えている。

心からわかりあえることを前提とし、最終目標としてコミュニケーションというものを考えるのか、「いやいや人間はわかりあえない。でもわかりあえない人間同士が、どうにかして共有できる部分を見つけて、それを広げていくことならできるかもしれない」と考えるのか。

「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」という言葉は、耳に心地よいけれど、そこには、心からわかりあう可能性のない人びとをあらかじめ排除するシマ国・ムラ社会の論理が働いてはいないだろうか。

実際に、私たちは、パレスチナの子どもたちの気持ちはわからない。アフガニスタンの人びとの気持ちもわからない。

しかし、わからないから放っておいていいというわけではないだろう。価値観や文化的な背景の違う人びととも、どうにかして共有できる部分を見つけて、最悪の事態である戦争やテロを回避するのが外交であり国際関係だ。

好むと好まざるとにかかわらず、国際化する社会を生きていかなければならない日本の子どもたちに、より必要な能力はどちらだろう。もちろん協調性がなくていいとは言わないが、日本の子どもたちは世界標準から見れば、まだまだ集団性は強い方だ。ならばプラスαの能力として、これからの教育が子どもたちに授けていかなければならないのは、この「社交性」の方なのではないか。

読者諸氏は、PISA 調査（Programme for International Student Assessment）という名前を聞いたことがあるだろう。OECD（経済協力開発機構）が、参加各国の 15 歳を対象に 3 年ごとに行っている世界共通の学力調査だ。

調査項目は「読解力」「科学的リテラシー」「数学的リテラシー」、そして 2009 年からは一部の国で「デジタル読解力」が実施されている。このうちの、特に「読解力」の項目で、日本の子どもたちの成績が、2000 年の 8 位から、14 位、15 位と徐々に後退して、これが学力低下問題の議論の発端となった。

実際には、参加国数が、32、41、57、65 ヵ国と増えてきたこと、上位国の差は僅差であって日本の成績が有意に下がっているわけではなかったことなどを見れば、これはいかにも結論ありきの「ためにする議論」であった。また、2009 年には、日本は 8 位と少し盛り返している。

また、これはあまり指摘されていないことだが、近年の調査では人口 5000 万人以上の国で、

日本よりも上位にランクされている国はない。いろいろな要因があるのだろうが、結果としてPISA調査は、小さな国に有利になっている。そして、驚くべきことに2009年のPISA調査では、初登場の「上海」が1位に躍り出た。これは意表を突くものであった。PISA調査は国ごとに参加するものだと私たちは思っていたのだが、地域で参加して、ものの見事に1位をかっさらっていってしまった。善し悪しは別にして、こういった発想は日本人にはあまりない。

日本の話に戻る。

もちろん、日本の子どもたちの学力に、まったく問題がなかったわけではない。たとえば日本の子どもたちは一般に、白紙回答率が高いと言われている。学びのモチベーションが低下しているので、少しわからない問題があると、回答欄に何も書かずに試験を終えてしまうのだ。

あるいは､複数以上の回答がある問題に対しての白紙回答率が高かったとも言われている。日本の学校では、教員が正解を抱え持っていて、生徒がそれを当てるような授業を続けてきたために、複数の回答がある設問に対して、子どもたちは何を聞かれているのかさえわからずに戸惑ってしまうのだ。

この手の設問で､日本の教育界にショックを与えたのが「落書き問題」と称される設問だった。以下、その内容を少し端折って書く。

ネット上に､「学校の壁に落書きが多くて困っている」という投書があった。一方で「いや落書きも、一つの表現ではないか。世の中にはもっと醜悪な看板が資本の力で乱立しているではないか」という投書があった。

「さて、どうでしょう？」

という設問である。「さて、どうでしょう？」と聞かれても、日本の多くの子どもたちは、何を聞かれているのかさえわからなかった。落書きは悪いに決まっているから。

私は設問を少し変えて、学生たちに問うてみる。

「では、落書きが許される場合は、どんな場合でしょう。自分のことでもいいし、社会的にでもいいです」

学生たちは少し考えてから、以下のような発言をする。

「その落書きを気に入ったら」……正解。

「その落書きに芸術的な価値があったら」……正解。

「すぐに落とせるものなら」……なるほど、寛容だね。正解。

中学生から得た答えで私が気に入ったのは､「明日、取り壊し予定だったら」……この視点の転換はとても素敵だ。正解。

そして、数百人に一人だが、一定の割合で次のような答えをする学生がいる。

「独裁国家だったら」

もしもあなたが、独裁国家の日本大使館に勤務していて、壁に「打倒〇〇体制」と落書きされたとしたら､「まったく落書きをするなんてけしからん。道徳がなっとらん」と嘆くだ

ろうか。その、命がけで書かれたはずの落書きを、公衆道徳の問題だけで片づけられるだろうか。

落書き問題が問いかけているのは、文化や国家体制が違えば、落書きさえも許される局面があるという点だ。そして、落書きでしか表現の手段がない人びとにも思いを馳せるという能力こそが、PISA 調査が求める異文化理解能力の本質だ。

さて、この PISA 調査で、毎回上位に名を連ねるのがフィンランドである。

以来、フィンランドの教育方法が注目を集め、「フィンランド・メソッド」なる言葉まで生まれ、いまも教育関係者の視察が相次いでいる。フィンランドの国語教科書は翻訳・出版もされているので、関心のある方はご覧になっていただきたい。

特にそこで注目して欲しいのは、各単元の最後が演劇的な手法を使ったまとめになっている箇所が、数多くある点だ。

「今日読んだ物語の先を考えて人形劇にしてみましょう」
「今日読んだ小説の、一番面白かったところを劇にしてみましょう」
「今日のディスカッションを参考にして、ラジオドラマを作ってみましょう」

といった具合だ。

ここにはどんな意味があるのだろう。

フィンランド・メソッドに象徴されるヨーロッパの国語教育の主流は、インプット＝感じ方は、人それぞれでいいというものだ。文化や宗教が違えば、感じ方は様々になる。前章までで説明してきたように、車内で他人に声をかけるという行為一つとっても、それを失礼だと感じる人もいれば、声をかけなければ失礼だと感じる人もいる。これは内面の自由、良心の自由に関わることなので、強制することはできないし、教育の場でそれを一律にしてはいけない。特に宗教などが違うと、これを強制することは人権問題にまでなる。

しかし、多文化共生社会では、そういったバラバラな個性を持った人間が、全員で社会を構成していかなければならない。だからアウトプットは、一定時間内に何らかのものを出しなさいというのが、フィンランド・メソッドの根底にある思想だ。

これは現行の日本の国語教育と正反対の構図になっていることがわかるだろう。私たちは、「この作者の言いたいことは何ですか？　50 字以内で答えなさい」といった形でインプットを狭く強制され、一方でアウトプットは個人の自由だということで作文やスピーチでお茶を濁してきた。しかし、現実社会は、どちらに近いだろうか。アウトプットがバラバラでいいなどという会社があったら、即刻潰れてしまうだろう。しかし、どの企業も多様な意見や提案を必要としている。問題は、その多様な意見を、どのようにまとめていくかだ。

フィンランドの教育においては、いい意見を言った子どもよりも、様々な意見をうまくまとめた子が誉められると聞く。

日本では、A、B、C、D、E と様々な意見が出て、最終的な結論が B となったら、B 君が先生に誉められる。あるいはユニークな意見を言った C さんが誉められるかもしれない。

しかしフィンランドでは、何も意見を言わなかったとしても、Ｆ君が全体のとりまとめをしたとしたら、彼が一番誉められる。日本でそんなやり方をしたら、「Ｆ君は、何も意見を言っていなくて、ただまとめただけなのに誉められるなんてずるい」と言われるかもしれない。

OECD が PISA 調査を通じて求めている能力は、こういった文化を越えた調整能力なのだ。これを一般に「グローバル・コミュニケーション・スキル（異文化理解能力）」と呼び、その中でも重視されるのが、集団における「合意形成能力」あるいはそれ以前の「人間関係形成能力」である。

このような話を教育関係の講演会ですると決まって、「あ、金子みすゞですね。『みんなちがって、みんないい』ですね」と言う先生方がいる。私はそうは思わない。そうではないのだ。

「みんなちがって、たいへんだ」

という話をしているのだ。

OECD の基本理念は、多文化共生にある。

多文化共生とは何か。それは、企業、学校、自治体、国家など、およそどんな組織も、異なる文化、異なる価値観、異なる宗教を持った人びとが混在していた方が、最初はちょっと面倒くさくて大変だけれども、最終的には高いパフォーマンスを示すという考え方だろう。

先に見たように、成長型の社会では、ほぼ単一の文化、ほぼ単一の言語を有する日本民族は強い力を発揮した。しかし、成熟型の社会では、多様性こそが力となる。少なくとも、最新の生物学の研究成果が示すように、多様性こそが持続可能な社会を約束する。

だとすれば、これから国際社会を生きていかなければならない子どもたちには、「最初はちょっと大変だけれど」の、その「大変さ」を克服する力をつけていこうというのが PISA 調査の最大の眼目だろう。

しかし日本では、調査結果のじり貧状態だけに目がいって、学力低下の議論が巻き起こり、教科学習のコマ数を増やし、せっかく作られた総合的な学習の時間を減らすという愚挙が行われた。2000 年代後半の日本の教育政策がいかにトンチンカンなものになっていたかがわかるだろう。それはある種の教育の鎖国状態と呼んでもいい。

みんなちがって、たいへんだ。

しかし、この「たいへんさ」から、目を背けてはならない。

【出典】平田オリザ（2012）『わかりあえないことから―コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書、pp.205-217.

※出題に際して、原文の縦書きを横書きにし、小見出しを削除、年数等の漢数字を算用数字に改めた

設問 1

筆者が考える日本とフィンランドの国語教育の違いを 200 字以内で述べなさい。

設問 2

「コミュニケーション能力」をどのようなものと捉えるべきか、筆者の理解を踏まえつつ、あなた自身の経験を交えて意見を 600 字以内で述べなさい。

**第２問　（経済経営学部　経済経営学科）**

以下の資料１～ 11 は『周南市人口ビジョン改訂版』（令和２年）からの引用である。これらの資料を参照しながら、以下の設問に答えなさい。

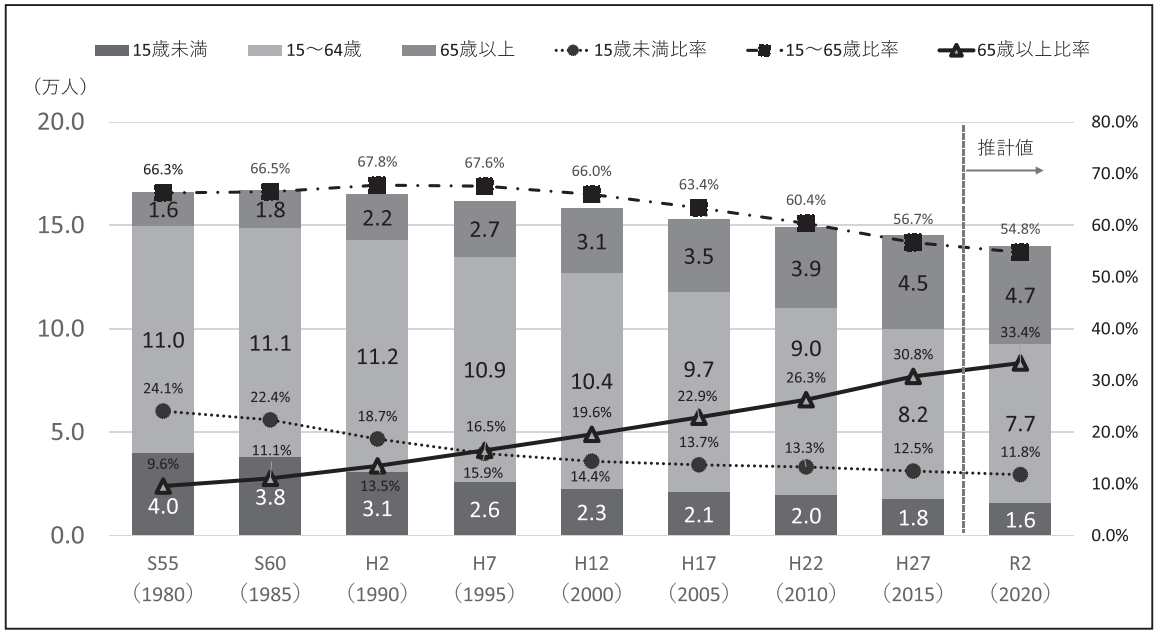
設問１

資料から読み取れる周南市の人口の推移の特徴について、300 字以内で述べなさい。

設問２

周南市の人口の推移について、何が課題であると考えるか、またその課題を解決するためにはどのような取り組みが必要であると考えるか、500 字以内で述べなさい。

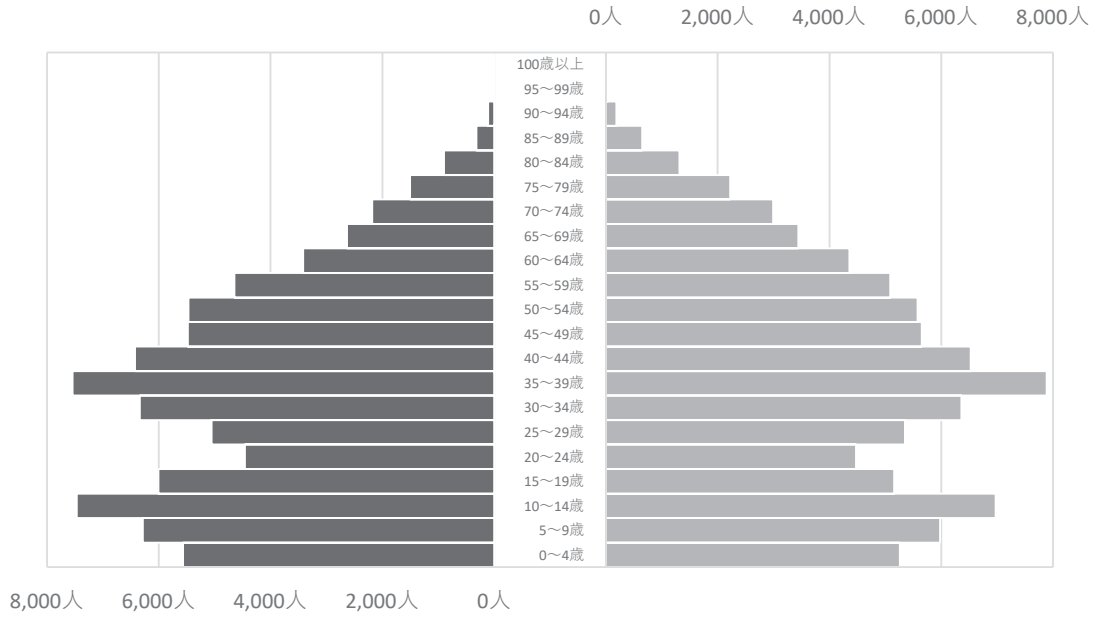
資料１：年齢３区分別人口の推移



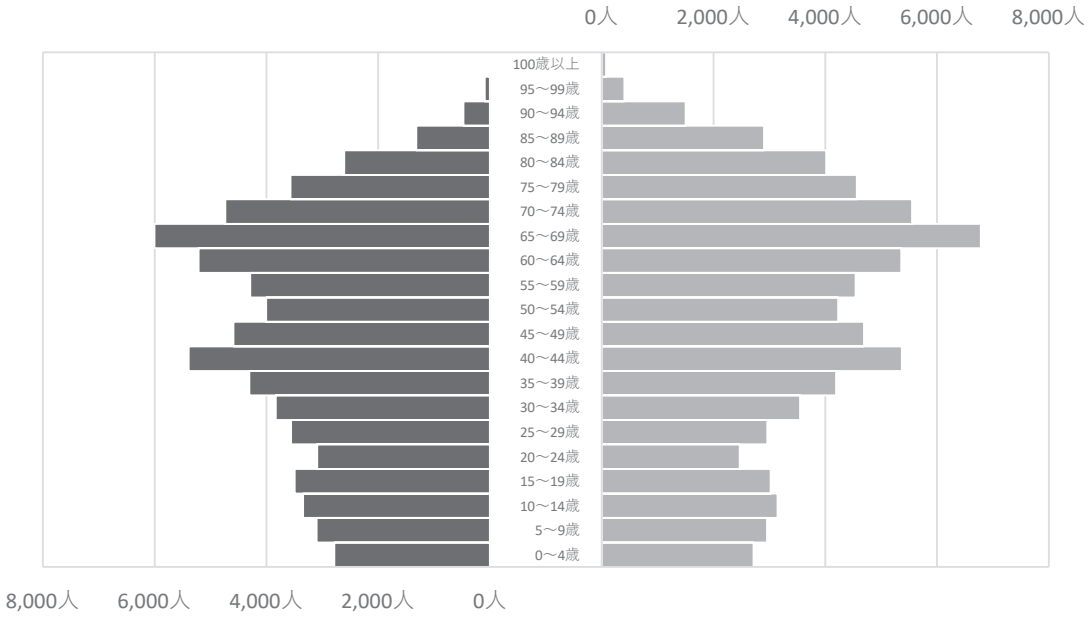

（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p. 4 を基に作成（元データは山口県「保健統計年報」、厚生労働省「人口動態調査」）

資料２：性別・年齢別人口（人口ピラミッド）の推移

«昭和 60（1985）年»



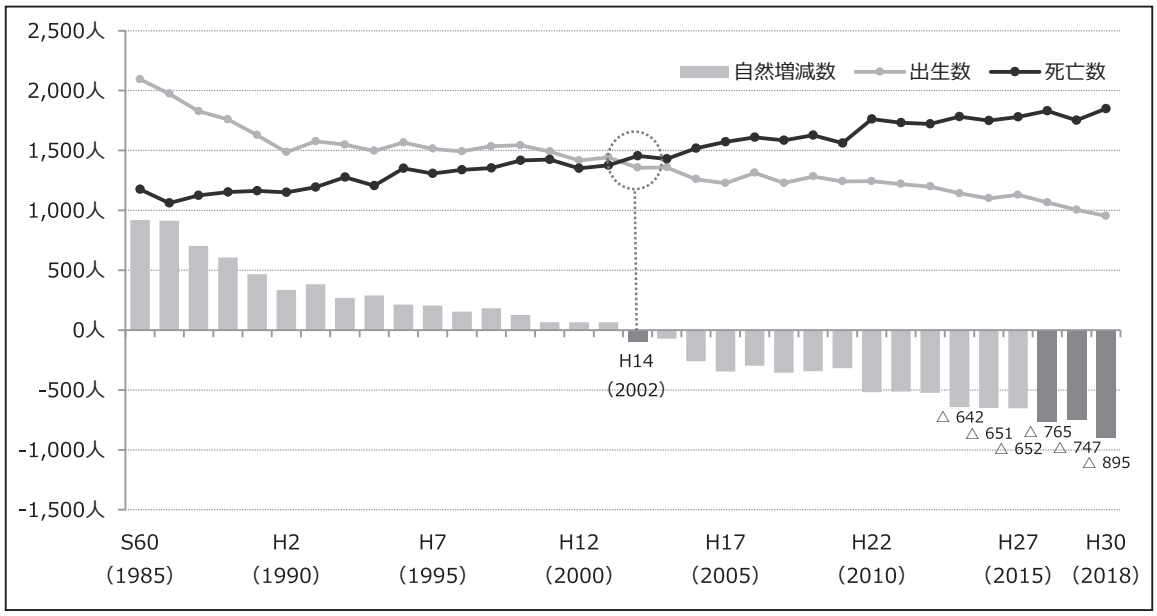

«平成 27（2015）年»




※左が男性、右が女性である

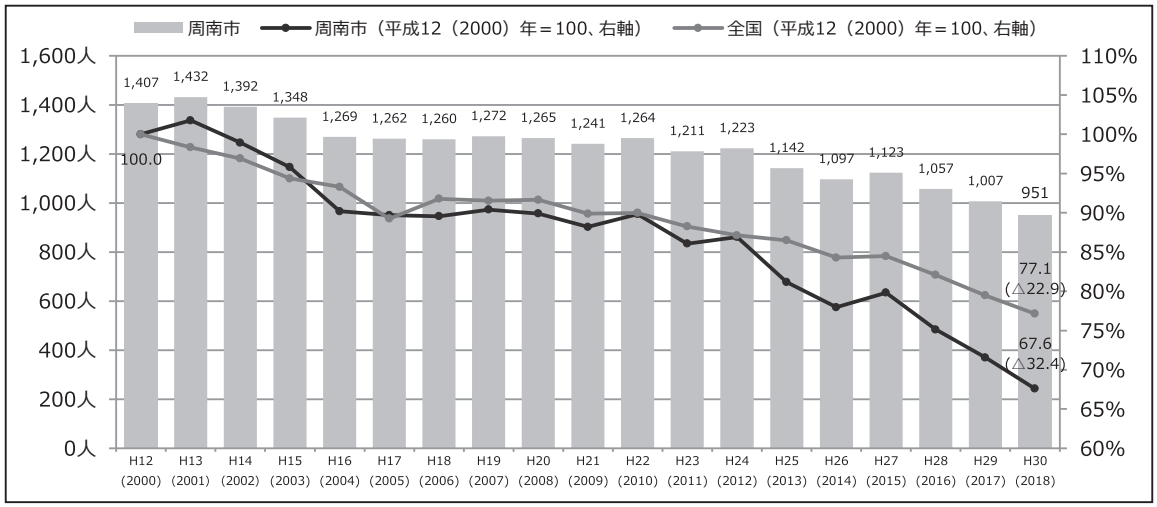
（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p.5 より（元データは総務省「国勢調査」）

資料３：自然動態



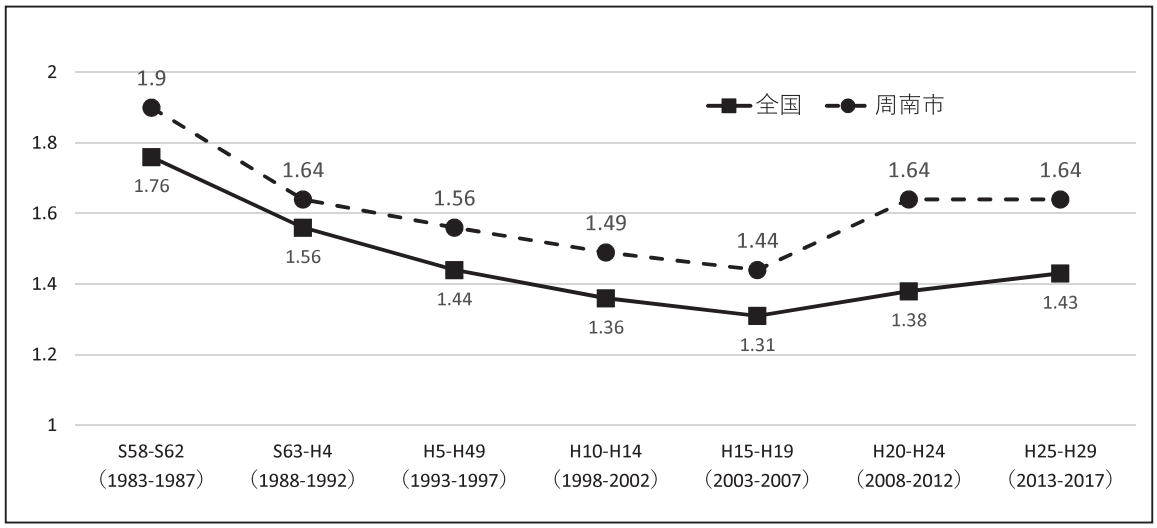

（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p.６より（元データは総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数」）

資料４：出生数の推移




（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p.６より（元データは山口県「保健統計年報」、厚生労働省「人口動態調査」）

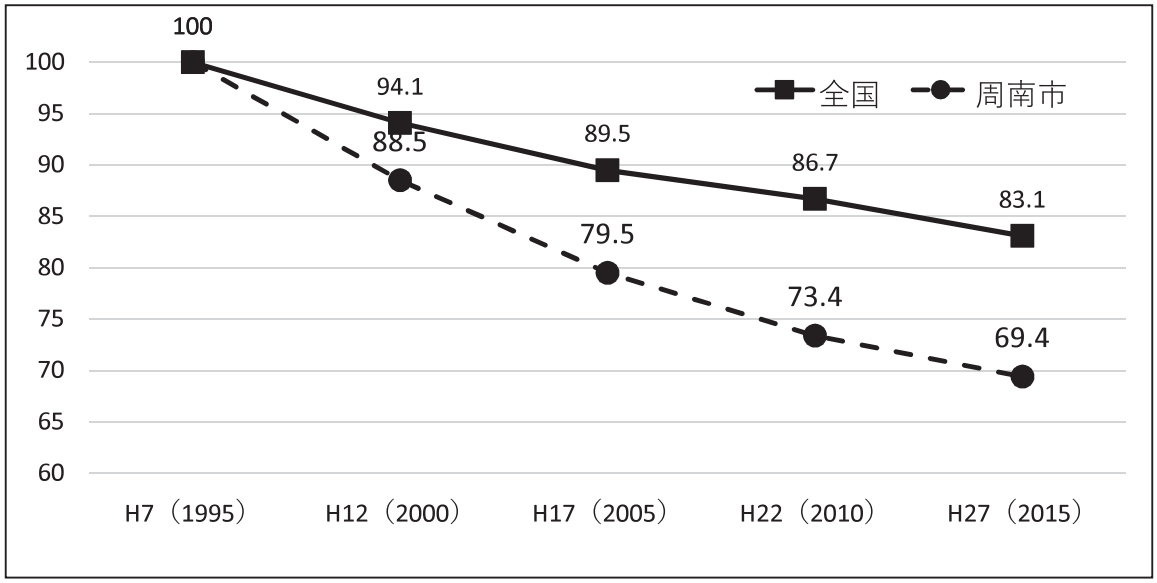
資料５：合計特殊出生率の推移




（注）1998-2002 年以前の合計特殊出生率は、徳山市、新南陽市、鹿野町、熊毛町の合計特殊出生率を各自治体の 15-49 歳女性数で加重平均して算出した

（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p. 7 を基に作成（元データは厚生労働省「人口動態保健所・市区町村別統計」）

資料６：女性数（15-49 歳）の推移（1995 年＝ 100）



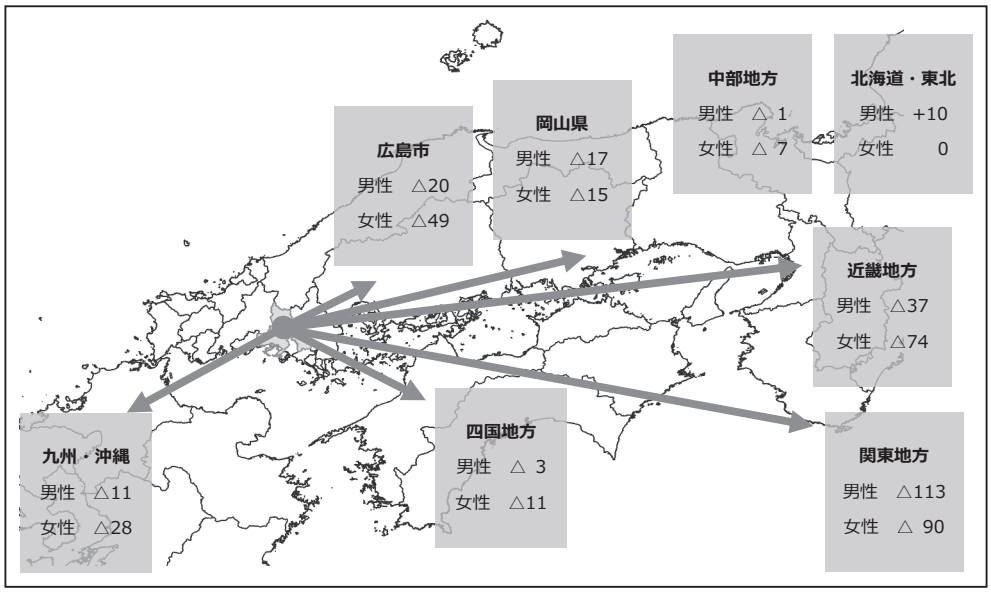

（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p. 9 を基に作成（元データは総務省「国勢調査」）

資料７：社会動態

（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p.11 より（元データは総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数」）

資料８：相手先地域別転入出超過数【県外】

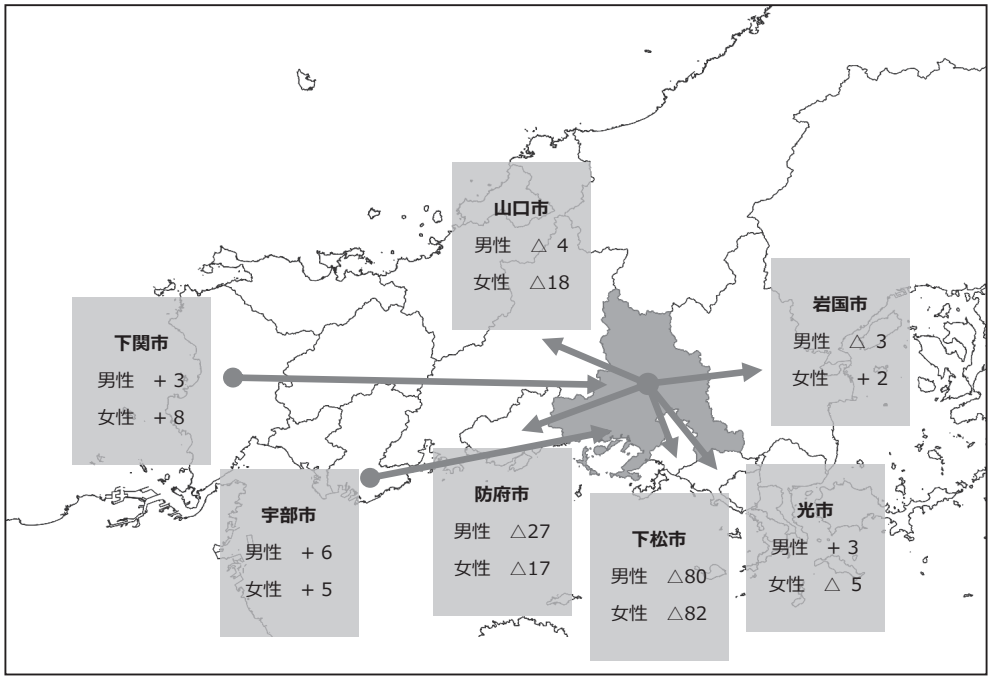
（平成 29（2017）年と平成 30（2018）年の平均） 単位：人




（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p.13 より（元データは総務省「住民基本台帳人口移動報告」）

資料９：相手先地域別転入出超過数【県内】

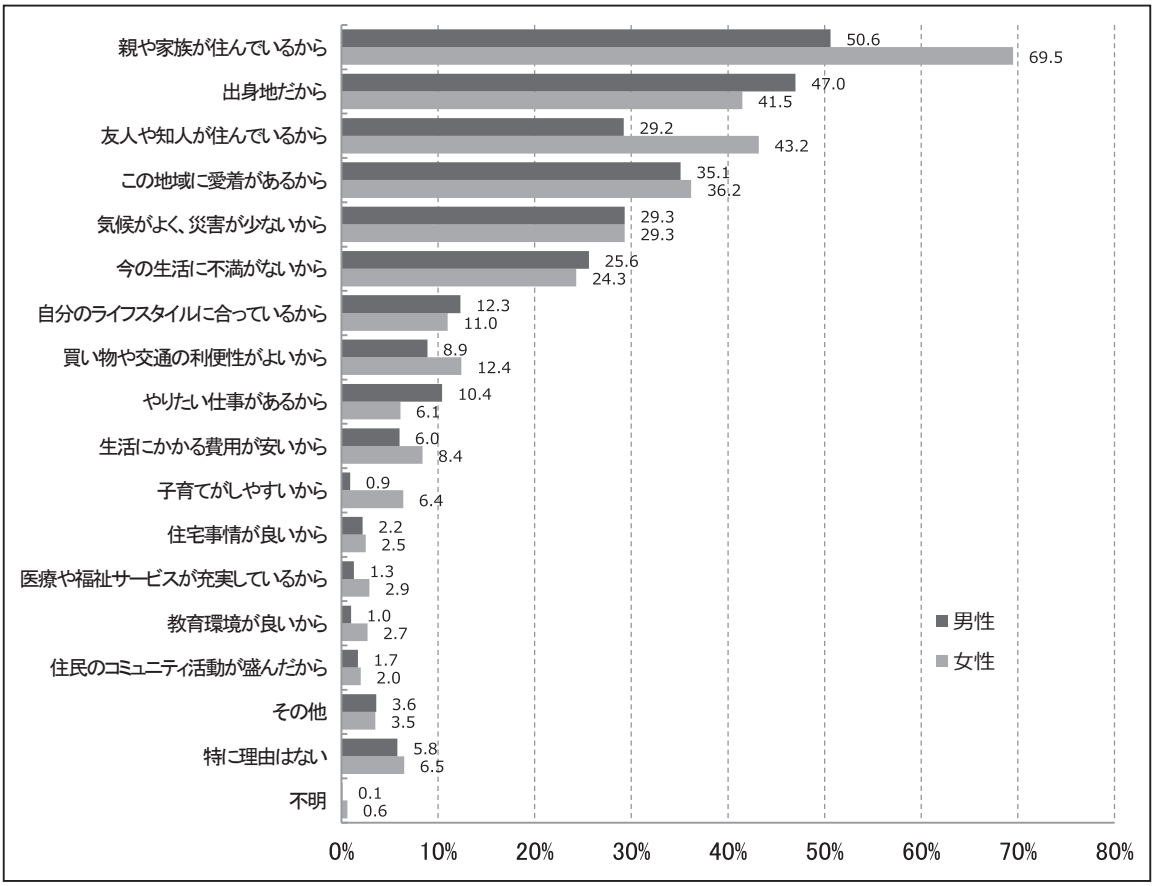
（平成 29（2017）年と平成 30（2018）年の平均） 単位：人




（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p.14 より（元データは総務省「住民基本台帳人口移動報告」）

注：資料８・資料９ともに、図中の△は－（マイナス）を表します。

資料 10：周南市に住み続けたい理由




※『定住・移住に関する意識調査』

①調査地域・対象 市内の 18 ～ 34 歳の男女 3,600 人（対象者数：22,396 人）

②抽出方法 地区別の無作為抽出

③調査方法 郵送法（郵送配布、郵送回収）

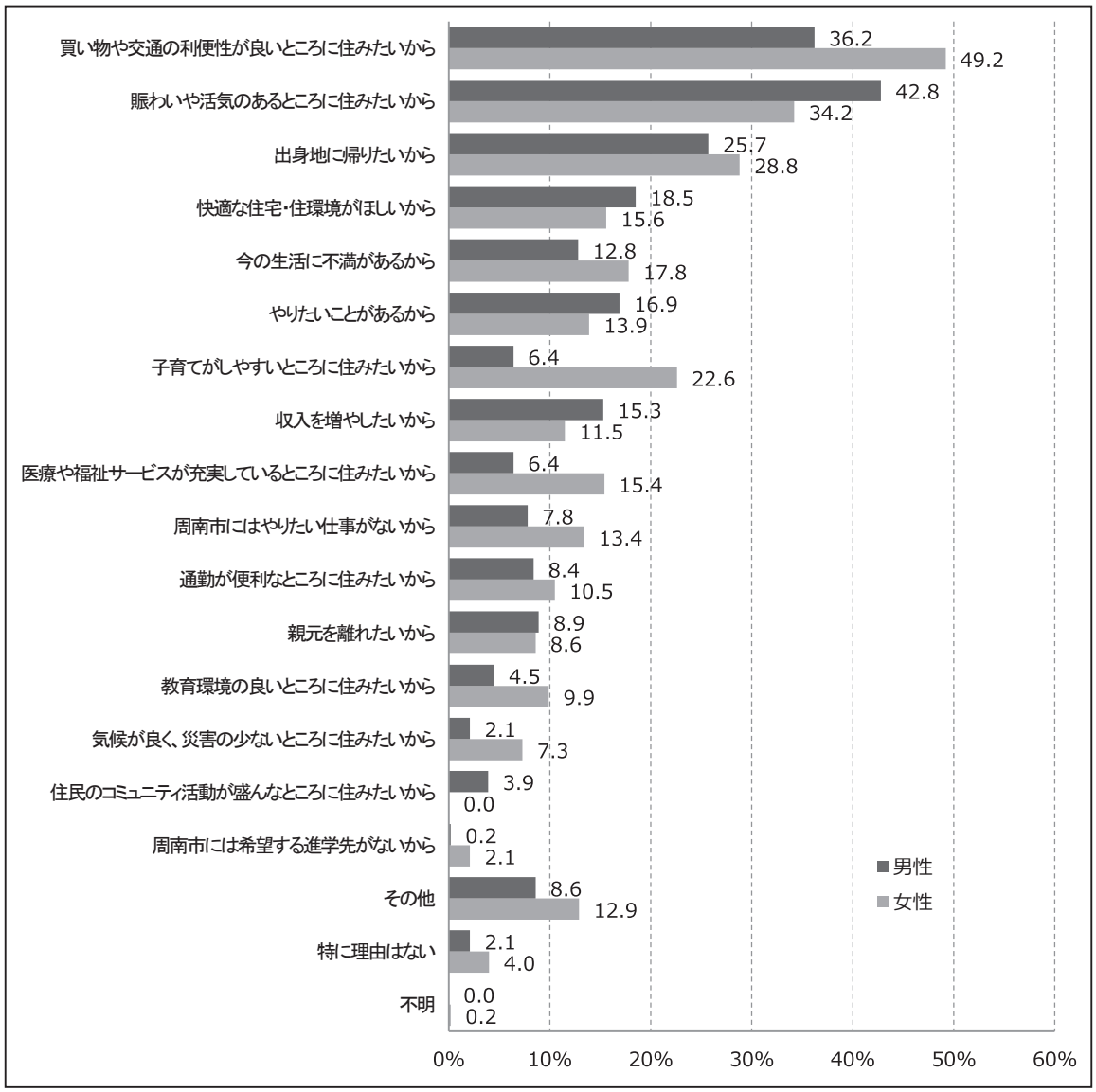
④調査実施期間 平成 27（2015）年 6 月 30 日～ 7 月 13 日

⑤有効回収数（回収率）907 件（25.2%）

※複数回答可の質問

（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p.29 より

資料 11：周南市から移住を希望する理由




※『定住・移住に関する意識調査』（資料 10 と同じ調査）

※複数回答可の質問

（出典）『周南市人口ビジョン改訂版』p.30 より

**第３問（人間健康科学部　スポーツ健康科学科）**

図１～３は、「日本一流競技者における競技開始年齢およびトップパフォーマンスに至るまでの期間：競技種目差および男女差に着目して」から作成した日本人一流競技者における競技開始年齢及びトップパフォーマンスに至るまでの期間、オリンピック出場年齢に関する図である。また、表１は長期競技者育成モデルにおける６つの段階を説明したものである。これらの図表をみながら以下の設問に答えなさい。

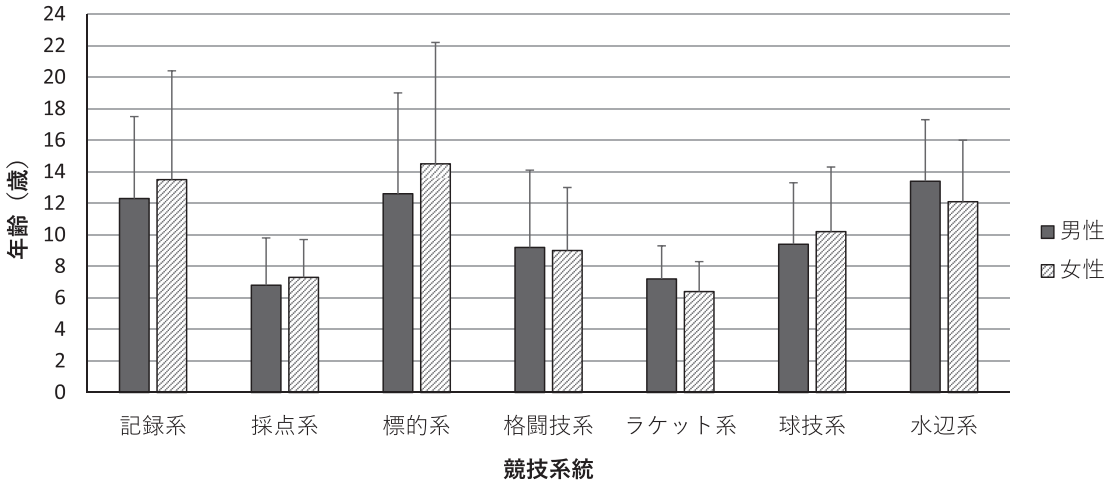
設問１

図１及び図２は、日本人一流競技者における競技開始年齢とトップパフォーマンスに至るまでの期間を７つの競技系統に分けて示したものである。これらの競技系統を適切にグループ分けし、それぞれのグループについて、一流選手に至るまでの特徴を 200 字以内で論じなさい。（ただし、性別による差異について言及する必要はない）

設問２

設問１を踏まえつつ、図３のオリンピック出場年齢及び表１の長期競技者育成モデルを参考にして、日本のジュニア期（小学生期・中学生期・高校生期）における競技者育成のアプローチについて 400 字以内で提案しなさい。

図１．日本人一流競技者の競技開始年齢

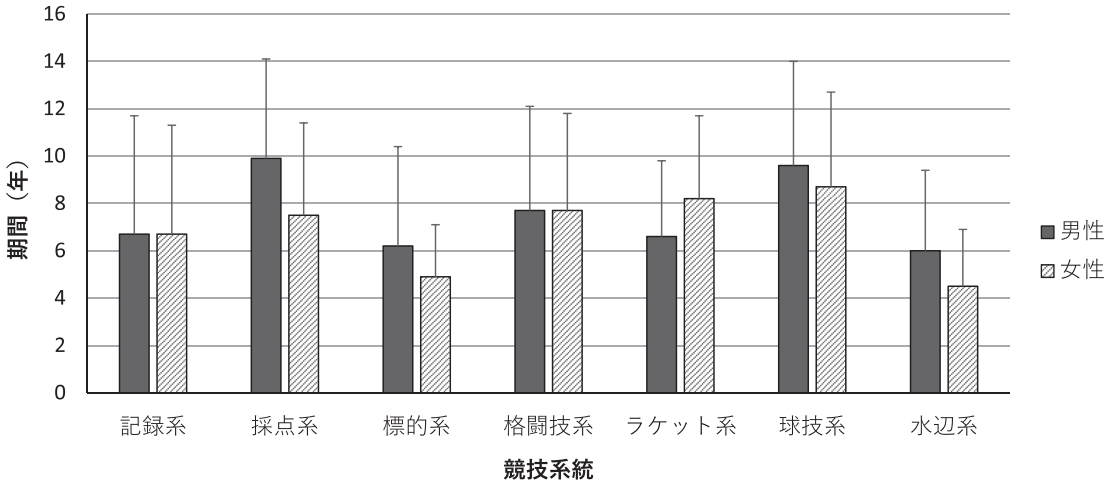



【出典】池田達昭，勝亦陽一，鈴木康弘（2022）日本一流競技者における競技開始年齢およびトップパフォーマンスに至るまでの期間：競技種目差および男女差に着目して．体育学研究．67：303-317．より作成

注１：男性の競技開始年齢における競技系統間の有意差：採点系・ラケット系・格闘技系・球技系＜記録系・標的系・水辺系、採点系＜球技系（＜；ｐ＜.05）

注２：女性の競技開始年齢における競技系統間の有意差：ラケット系・採点系・格闘技系・球技系＜記録系・標的系、採点系・格闘技系＜記録系・標的系、ラケット系＜球技系・水辺系（＜；ｐ＜.05）

図２．日本人一流競技者が競技開始から国際大会出場・全国大会入賞水準に至るまでの期間

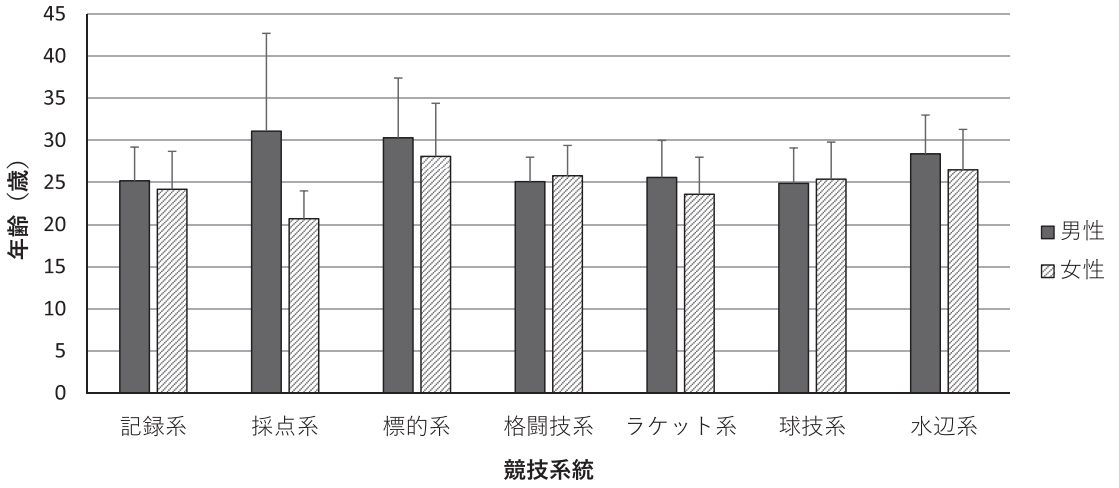



【出典】池田達昭，勝亦陽一，鈴木康弘（2022）日本一流競技者における競技開始年齢およびトップパフォーマンスに至るまでの期間：競技種目差および男女差に着目して．体育学研究．67：303-317．より作成

注１：男性の競技開始年齢における競技系統間の有意差：水辺系・標的系・記録系＜球技系・採点系（＜；ｐ＜.05）

注２：女性の競技開始年齢における競技系統間の有意差：標的系・記録系＜採点系・格闘技系・ラケット系＜球技系、水辺系＜ラケット系（＜；ｐ＜.05）

図３．オリンピック代表選手の年齢




【出典】池田達昭，勝亦陽一，鈴木康弘（2022）日本一流競技者における競技開始年齢およびトップパフォーマンスに至るまでの期間：競技種目差および男女差に着目して．体育学研究．67：303-317．より作成

注１：男性の競技開始年齢における競技系統間の有意差：球技系・格闘技系・記録系・ラケット系＜水辺系・標的系・採点系、水辺系＜採点系（＜；ｐ＜.05）

注２：女性の競技開始年齢における競技系統間の有意差：採点系＜ラケット系・記録系＜球技系・格闘技系・水辺系・標的系、球技系＜標的系（＜；ｐ＜.05）

表１．長期競技者育成モデルにおける６つの段階

著作権の都合により、公開できません

【出典】河合季信・和久貴洋（2018）世界の頂点を目指すアスリートの育成・強化の在り方と指導者の役割．公認スポーツ指導者養成テキスト 共通科目Ⅲ，公益財団法人 日本体育協会．pp25-31.